

O-2-5-26

インプラントオーバーデンチャーを応用した下顎無歯顎高度顎堤吸収症例におけるQOLの改善

○山内 大典, 浅井 澄人, 前川 修一郎, 吉野 晃, 船木 弘, 江黒 徹, 築瀬 武史, 渡辺 孝夫

日本歯科先端技術研究所

QOL Improved case applied with implant overdenture for edentulous mandible severe bone resorbed jaw

○YAMAUCHI D, ASAI S, MAEKAWA S, YOSHINO A, FUNAKI H, EGURO T, YANASE T, WATANABE T

Japan Institute for Advanced Dentistry

I 目的： 上下無歯顎の症例、特に高度に顎堤が吸収した下顎では総義歯の吸着が難しい症例が散見される。一方でインプラント体を埋入しアタッチメントを応用するインプラントオーバーデンチャーの有効性が報告されている。今回下顎の骨吸収が著しく、総義歯の吸着が得られない症例にインプラントオーバーデンチャーを応用し、QOLが大幅に改善し良好な経過を得たので報告する。

II 症例の概要： 患者は75歳女性。2018年8月、下の入れ歯が動いて全くかめないことを主訴に来院した。既往歴ならびに家族歴に特記事項は認めなかった。若い頃より齲蝕を原因とした抜歯を繰り返し、10年前に右下臼歯部にインプラント治療を行ったが、5年後に脱離したとのこと。その後、総義歯が安定せず流動食による食事をしており、通常の食事ができるようにしてほしいと当院を受診した。上下ともに無歯顎でレジン床の総義歯を装着していたが、とくに下顎は顎堤が高度に吸収しており、下顎総義歯は吸着せず安定しなかった。インプラント体を埋入できる部位を精査するためCT検査を行ったところ、下顎臼歯部は下歯槽神経やオトガイ孔までの距離が1mm～3mm程度であり埋入が難しいため、左右オトガイ孔間に2本のインプラント体（33・43相当部ともに直径3.7mm長さ6mm、FINESIA, HA, 京セラ）を埋入しインプラントオーバーデンチャーとする治療計画を立案し、同意を得た。サージカルガイドを作製し、2018年12月、静脈内鎮静法下で33・43相当部にインプラント体を埋入した。初期固定は十分であり、カバースクリューを締結し手術を終了した。知覚異常などの所見もなく術後の経過は良好であり、埋入から4か月後に二次手術を行った。粘膜の安定した1か月後に印象採得及び咬合採得を行い、下顎インプラントオーバーデンチャーを作製した。2本のインプラント体はバータイプのアタッチメントで連結し、クリップを装着した。

III 経過： 最終補綴装置の装着から3年経過した現在も骨吸収も認めず周囲組織は安定しており、良好に咀嚼機能を維持できている。今後もメンテナンスを継続し経過を追っていく。

IV 考察および結論： 下顎無歯顎高度顎堤吸収症例へのインプラントオーバーデンチャーの適用は、咀嚼力が回復し、患者のQOLを大幅に改善する治療法であることが示唆された。（治療はインフォームドコンセントを得て実施した。発表においても患者の同意を得た。）